

廣池千九郎と神

—— 廣池における実存と超越 ——

目次

- 一、はじめに
- 二、廣池の限界状況
 - (一) 幼少期からの病氣
 - (二) 青年期の立志と苦学
 - (三) 前期壮年期の苦学と闘病
- 三、宗教的超越
 - (一) 理性的信仰
 - (二) 理性からの超越
 - (三) 死に直面しての超越
- 四、宗教よりの超越
- 五、廣池と諸聖人との接点
 - (一) 諸聖人に共通一貫するもの
 - (二) 廣池に感銘を与えた聖人の事跡
- 六、廣池の最高道德的神觀と信仰心
 - (一) 神人一如の神觀
— 神は人間の心(至誠心)と直接つながっているという神觀 —
 - (二) 神の心と人の道
 - 1) 神の心とは
 - 2) 聖人に倣って
 - (三) 真の救いへの道と神
- 七、まとめ — 廣池千九郎と神 —

玉井

哲^{あきら}

一 はじめに

偉大な思想家、教育家、宗教家にはみな等しく大きな回心のときがある。人間の偉大さと人間の神とのつながりの深さ・広さ・その密度とは比例関係にあるように思える。

廣池千九郎（一八六六・三・二九—一九三八・六・四）の場合もそのように思われる。廣池の神とのつながりは、その生涯を通してながめるとき、そこには知的、感情的、思想的さらには肉体上の具体的な諸状況の中で、当時の儒教的教育環境のなかで儒学に学び、更に神道や仏教、キリスト教と出会い、大きく揺れ動いている。

廣池家の長男として、両親の深い慈愛と日本の信仰（浄土真宗）の土壌のもと、道徳心と宗教心を育まれながら、立身出世し天下国家に貢献することを目指していた苦学の青年時代、自己の生死にかかわる大病に直面して、生涯を何に捧げるかという大問題に遭遇した前期壮年時代、また一宗教に身を投じ、宗教的訓練に没頭すると同時に、一宗教を信じて生きるという立場を超えはじめの壮年時代、そして天から与えられた普遍的な使命に生きようと決意する高年時代と、廣池千九郎の神理解、神との距離は大きな変容を遂げている。

今回の報告では、特に歴史学、法学を学び、数々の恩師につながり導かれ、東京帝国大学から法学博士の学位を受けた廣池が、神を知的（理性的）に理解するという次元に止まることなく、学者としての良心に誠実に、しかも日本の国体すなわち伝統的な精神、思想に合致し、あわせて世界に通じる普遍的な神理解を追求していったこと、さらには世界の諸聖人の生き方に倣い、神の心になる努力（神意同化）をし、ついには神の力を実感し、神と人間とが感応同交する次元にまで、心の訓練を繰り返し、心を低く・広く・柔らかに・清く・深めていったその過程を、人間学的に研究しようとしている。

具体的には、廣池がその人生の途上で、諸聖人と対話せざるを得なくなった背景を探り、そのプロセスでどのような宗教観を形成していったかを明らかにしたい。また、廣池が諸聖人との対話の中で、どのような精神を確立していったか、そしてそれが、廣池のその後の生き方にどのように影響を与えたかについて検討していきたい。最後に、晩年の廣池の神のとらえ方（宗教心）の特徴と、廣池の神についての言及が、今日的にいかなる意味をもっているのかということについて、考察をしてみたい。

二、廣池の限界状況

一般に神を信じるといっても、素朴で伝統的な信仰心に基づいて生活している間は、神に親しみと敬愛の念を抱いてはいても、未だ自覚的・主体的に神を求め、神と対峙するといった切実さは見られない。

ところが人生の荒波に遭遇し、この世の不条理に気づき、矛盾にぶつかり、自分の力ではどうしようもないという現実に出会ったときから、人は虚無的になるか、神との真の実存的な対話を始める。人間は多かれ少なかれ、限界状況という人生の岐路に直面して、はじめて神と出会い、神と対峙していく。廣池の場合も例外ではない。

(一) 幼少期からの病氣

廣池家の長男として、大分の中津に生まれた千九郎は、幼少期から決して健康な身体ではなかった。再三、頭痛や耳病、胃病、脳病などに悩まされ、両親の心労と治療への努力は大変なものであった。（『廣池千九郎日記』所収「初忘録」「履歴第二／第三号」参照）しかし、「神仏の信仰は幼年の時よりの習慣でありましたが、しかしながらその信仰は決して迷信ではありませんぬ」（『回顧録』一四頁）と記されているように、それらの病氣を祈禱

や古いなどで治療しようとした形跡は見られない。

この頃の廣池は、素直に父祖の信仰に従い、特に浄土真宗への信仰に篤かった父親の影響のもと、神仏への素朴な信仰心をいだいてすごしている。次の十八年、十九年の誓いや、先の『初忘録』の記録は、廣池が素朴で素直に家の伝統的宗教（神仏習合的信仰）に従った生活をしていることを表している。

※明治十八年一月の誓い ※明治十九年十一月の誓い

- (1) 七年参詣のこと。 (1) 人を誇らず。
- (2) 正直なること。 (2) 貧弱を憐れむ。
- (3) 孝行のこと。 (3) 五十以上にて国事に奔走、死を致すも可なり。

※「同年(19年)旧二月三日、祖父十七回忌法会を執行せられ候につき帰郷、拜仏回向す(予は元来真宗を信ず)」(『廣池千九郎日記』①21頁)

(二)、青年期の立志と苦学

二十六歳にして京都に出た廣池は、真正の歴史家を目指し、自らの研究と生計を両立する手段として『史学普及雑誌』の発行をしている。その目的は「読者をして人類の行跡には一定不動の法則あることを悟らしめ、これによりて各自に立身、出世、治国済民の良法を發明せしむるのみならず、ひそかに時弊を救正しておおいに風教を振興し、もって国体を強固にし、かねて国光を發揚せんとするの微意をも存するなり」と同雑誌創刊号に明記している。この時期の廣池の生活は極めて苦しく、生活費を節し、一心不乱に歴史や古典の研究に励んだという逸話が残されている。

しかし、この時期の廣池が特に信仰を求めたという形跡は見受けられない。ただ、京都という神社・仏閣の多い地での生活は、神仏を礼拝し、中津在任の折、儒学者・帆足万里の高弟、小川含章(明治十六年入塾)から受けた、皇室中心の国体を護持していくという皇室尊重の思想を、より強固なものにする伏せ込みになったことは想像に難くない。

この苦学のただなかに、廣池(二八歳)は『史学普及雑誌』の販売店まわりのつらい帰途、大阪の住吉神社で次のような誓いを残している。この精神は、廣池の苦闘の京都時代に一貫した覚悟と誓いとして理解することが出来る。

※明治二十七年七月三十一日

- (1) 国のため天子のためには生命を失うも厭わず (2) 親孝心
- (3) 嘘を言わず正直を旨とす (4) 人を愛す
- (5) 住吉神社の恩恵を忘れず参拝

(三)、前期壮年期の苦学と闘病

明治二十八年、国学者井上頼園のはからいで、『古事類苑』の編纂に従事するために上京して以来、その完成までの十三年間、その編纂のかたわら、明治三十七年からは早稲田大学の講師となり、歴史研究、法制史研究、特に東洋法制史の研究をすすめている。そして、明治四十三年には穂積陳重の勧めにより、「支那古代親族法の研究」と題して東京大学に学位論文を提出し、大正元年には法学博士の学位をあたえられている。

その間、廣池は家庭をも犠牲にし、「出世のために(身体)を苦しめた。毎夜一時過ぎまで」(『同上日記』大正元

年一〇月一〇日と、後に反省するように、身を粉にして学問に打ち込んでいる。そのためしばしば体調を崩し、研究と静養を繰り返しながら、やっと身体を持ちこたえていたようである。この時期、仕事において『古事類苑』の宗教部や神祇部を担当したことや、研究的関心ばかりでなく身体的にも信仰によって心と身体の救いの問題に関心を抱き、仏教(雲照律師)やキリスト教の教えに接している。

しかし、この当時は、特定の宗教を信仰するまでには至っていない。

このように当時の廣池は、特定の宗教に属して信仰生活に入るという意識には達していない。健康を害し、神の摂理・自然の法則への疑問を抱き、純粹に孔子や釈迦・キリストの教えに、心揺さぶられながらも、今一步それらの神を信じることができず、道を求めてさまよっている。それは、廣池に神をもとめる精神的・身体的条件は整っていても、時がまだ熟さず、全人格を挙げて傾倒することができる神(信仰)に出会うまでには至っていないからといってもいいであろう。

(1) 「自分が宗教に対する関係は、初め京都にいた時分、余暇を持って、仏教とか耶蘇教の書物を見、多少その方面に興味を持ったのであったが、二十八年出京後、『古事類苑』の宗教部全部の編纂を引き受けからいつそう趣味を持ったのである。けれどもその時分は、信仰という心は、少しもなかった。しかるに三十七年に、脳病を煩ったとき、しきりに信仰を求めたのであるが、いっこう仏教とか耶蘇教とかの書物や説教では満足することが出来なかった。つい

で三十八年に至って、ますますその必要を感じたので鎌倉にて一夏禪の修養を試みたのであるが、どうしても自分の精神上に神とか仏とかを認むることができなかった。」「子が信仰」『回顧録』七九頁

(2) 「しかるに私は、積年学問上における研究の苦心が重なって、やや自己の健康を損せしことを自覚しましたので、明治三十七年頃より漸次に精神生活に一つの変化を生じ、これがために専門学研究のかたわら、つねに中国の『経書』、釈迦の『経文』及びキリ

スト教の「バイブル」等を繕きて古聖人の精神のあるところを味わい、静座冥想三昧に入ること数年間に及

んだのであります。」「モラロジの略説明」『回顧録』一二八—一二九頁

三、宗教的超越(世を出る)

(一)、理性的信仰

学者であった廣池が求めていた信仰は、自分の健康にも、生き方にも、また家の信仰にも国の伝統(国体)にも調和のとれた信仰であり、神についての教えであった。

廣池が最後のところでキリスト教に入信し切れなかったのも、仏教信仰に満足できなかったのも、日本的な伝統との違和感を感じ、社会的生命力のなさを感じたところにあつたようである。

その廣池が、明治四十年六月、伊勢神宮皇学館教授として赴任したその翌年、明治四十一年から「神道講義」を担当するよう委嘱されたことにより、日本古来の神道の研究を始めることになる。この神道研究が、廣池の宗教観や生き方に、新しい息吹を吹き込む契機となる。

ここに至って、廣池の心に、漸く信仰の火が灯り始める。それは知・情・意全体を賭して悔いることのない信仰に出会ったという観がある。

(3) (明治)三十七年、宗教を信ぜんとして止めしこと。

九七頁)

〔(1)国体(2)科学(3)生命〕三要素を要す。

(4) 「キリスト教の教理が我が国体に扞格して、仏教

(明治)四十二年、逢着す。」「廣池千九郎日記」②二

の寂滅為楽主義、厭世主義が自強不休の戊申詔書主

義と拮据する類である」(明治四十三年頃、廣池「神道史」草稿)

(5) 「三十年の病氣のときに、宗教の信仰を求めたことき、…神道に求めたのではなかった。その当時、神道というものは全く眼中になかったのである。ところが…現代の神道の研究を始めたところが、自分の予期とは全然反対であつて、現代の神道というものは、実にだいたいにおいて立派なもので、…いずれも古代わが民族の間に発生した倫理思想に基づき、

ことに十三派神道の内の有力なる一二の教派においては、その布教の教師といい、数百万の信徒といひ、その信仰の堅いことや、その品性の高潔なることは、実に宗教としては、理想に近いものと思はるほど立派なものであるということを調べ出したのである。そうしてその教派を研究した結果、自分において、初めて信仰の念が起こつたのである。」

『子が信仰』「回顧録」八〇—八一頁

(二)、理性からの超越(眞の誠の体験に出会う)

廣池が信仰したのは天理教であつた。神道十三派の調査研究のうち、上記のような印象をもつに至つたからである。しかもこの信仰とともに、廣池はほとんど神に引き寄せられて、その信仰心は純粹にして深まつていく。國家に貢献する目的をもつていたとはいへ、立身出世を目指し、正義一辺倒に歩んできた廣池には、自己の病弱な身体を、親身に無報酬に介抱する天理教の婦人の柔和な姿に、全く違つた精神的価値の世界があることを教えられるのである。またその婦人の眞実・誠の姿に感動し、天理教勢山支教会の会長、矢納幸吉氏から、教祖(中山みき)の実行や教理を聴くことを得、「はじめて世界諸聖人の教説を人間の精神作用及び行為に即してこれを実現することの可能を悟つた」(『回顧録』五頁)といふのである。更に自らも、次のような体験を与えられる。

明治四十二年十一月、上記教会の信徒となり、四十三年春ごろ、日本語の〈誠〉に到達する方法を問ひ、教会長から實地に「お助け」をするようにとの指導を受ける。それは今一色における誠の体験といわれている。この

誠の体験の中で、廣池は眞に神が生きて働き、人間の至誠を支え、人間の苦悩を助けるという奇跡に似た体験をする。

この誠の体験を通して、廣池は、理性に基づく正義の論理を越えた、慈悲の世界があることを実感的に体得するとともに、神の存在を認め、自己の心の立て替へを誓ひ、その神・大自然からの大恩に返済して行くことを決意するのである。

(6) 「病人は、三十七歳の夫人にて三ヶ年半の間、全身不随にして臥しておつたのを助けよといふのであります。

の向上を誓ひ、従来より以上に神様のお力をかしていただきたいと願つたのであります。(中略)

す。ここにおいて私は眞に当惑したのであります。その理由は物質的治療の方法既に尽きて、ただ死を待つばかりの病人に道徳心を注入して、その精神を改造しこれを更正せしめ、併せてその肉体の病を自発的に除去せしめようとするのでありますから、当惑するのは当然であります。すなわちこの場合に当たつては私の学力も、私の信仰上における勇氣も、その仕事に比して實に微弱なることを自覚したのであります。ここにおいて私はしらすしらすの間に、神様のお力にすがつたのであります。私は入信以来教会に對して、極めて微少な子供えをなして人心救済の万分の一にして頂いておつたのであります。この時神様に向かつていくばくの増額を誓ひ、かつ併せて自己の品性

かくてその病人は一ヶ月を経ざるに、左右の手が動くようになり、二ヶ月目には歩行することを得るようになったのであります。かくて今一色のお助け以来、私はしきりに多くの病者を救ひ、かつ多くの不幸に陥れる人々の運命を回復させ、その効果の上がるにつけて、漸次に非常に大なる道徳上の生命をとらえ得るに至つたのであります。すなわち第一に日本語のいわゆる誠という語の眞髓は、神の慈悲心に合することであつて、神の慈悲心とは物質的援助でなく、精神的に人心を救済することにあるということを見したのであります。…

されば、われわれ人間が一たび聖人の眞の教えに本づきて、人心救済をなすようになれば、たといそ

の方法は多少の欠点ありとするも、おのずからその精神及び行為が神の慈悲心に合致して、…その救済をなす当事者が、おのずから神の恩寵に浴すること（自然の法則に合する意味）は当然であります。第二に、この今一色における人心の救済の実行によりて、私はモラロジーにいわゆる伝統の大恩を痛切に体得した

のであります。すなわち従来私は神、聖人、君主及び親の大恩はこれを知っておりましたが、今回自分の実行によりてはじめて、感情的にかつ理性的に確實に体得するを得るに至ったのであります。」（『回顧録』一〇—一二頁）

（三）、死に直面しての超越

一方、神宮皇学館の教授として一週四、五時間の授業を行うかたわら、明治四十三年に学位論文を提出する（十一月提出）ために、無理に無理を重ねて来た廣池の身体は、ますます衰弱し、「このときに当たっては、全身の神経衰弱すでにその極度に達し、夜間静かに寝に就きて眼を閉するときには、その心身の衰弱を感ずることはなほだしく、大患の不日に襲来すべきことを自覚せずにはおられなかった」（『回顧録』三頁）という状態に陥っている。

この時期に、廣池は上記のような真実・誠の体験を味わっている。生命の極限と理性の極限とを同時期に体験しているといってもいいであろう。その極点が大正元年十二月六日である。それは、人間的には最高の榮譽・成功ともいえる学位授与の通知がくるのと、赤十字病院から死の宣告ともいえる絶対安静の「静臥して天命を待つ」状態に陥るの同時である。廣池はここで、一年の、更には二十年の延命を請い、この世での成功や栄達を捨て、ひたすら神の慈悲を実現する生き方に徹する決断をする。

廣池は神の存在を確信したということに止まらず、大正元年九月以後の生死の別れ道に立たされて、みずから

の学問的業績や社会的地位や名譽などのすべてを投げ捨て、自分の生命を神からの借り物と受け止め、全身全霊、ひたすらに人心の開發救済に捧げる覚悟をする。実はこの覚悟とその実行が、廣池を新たな苦闘の世界へと導くことになるのである。それは同時に、更なる飛躍へと廣池を導くことになる。

（ア）「予、名家の後を承け、これを再興せんと欲して奮闘

多年、ついに今日いささか内外の学界に名を知らる。

これがために身体はついに如何ともしすべからざるに至る。これ因縁なり。自ら造るところなり。予、名を得んと欲す、故に名を得たり。身を捨て、故に今まさに身を失わむとす。誰をか恨まん。自然の法則、神の摂理、ただ感謝のほかなし」

（『廣池千九郎日記』大正元年一〇月一七日）
「静臥し専ら天命を俟つ」

（『廣池千九郎日記』大正元年二月六日）
「去る七日（二月七日）夜、文部省より電報着し、学位授与、今日午後二時の由通知あり」

（『同上』大正元年二月一〇日）

「なき生命を助けていただく上は、今後の生命は自分のものにあらざるがゆえに、一切これを人を助くる道具に使うこと。右の次第につき、いかなる事あるも自分のために生くるのでなく、人様のために生かしていただくに居るといふことを忘れず、猷身の労働に服すること、前々治定の通り相違これなき候なり。つまり簡単にいえば、自分の損をすることだけを考えて、利益になることは皆捨つるといふように考うるのである。」

（『同上』大正元年二月二四日）

四、宗教よりの超越（世に出る）

天理教に入信したものの、学者としての廣池が求め、見つめていたのは、純粹に教祖その人の慈悲の姿であり、その慈悲心が世界の諸聖人といわれる孔子や釈迦、キリスト、ソクラテスを聖人たらしめているという確信であつ

た。日本皇室の永続の原因を、天照大神の天の岩戸籠り（その本質は、慈悲寛大自己反省の精神にあると廣池は考える）の事実にあると悟ったのも、この宗教体験によるものであった。

しかし、神ならぬ人間が、純粹に利己心を没却し、神の心（慈悲の心）になりきるということは容易なことではない。信仰の世界は、人間のはからい、理性を超えた真実・純粹の世界であると同時に、反面では、理性を眠らせ、現世での安心のために、真実を曲げ、盲信して行くという弱い側面をもっている。神に誓いを立てた廣池には、真実・誠に生きることを以外、眼中にはなかった。ここに人間廣池の新たな苦闘が始まるわけである。それは人格の根本的改造を必要とする壮絶なものであった。

大正元年の大患を頂点として、廣池は人生最大の危機に見舞われたが、同時にその危機をきっかけとして、生きる意味・価値観を百八十度転換させられている。従ってその後には続くいかなる境遇をも、反省と感謝の心をもつて貫き通るといふ覚悟と体験を通して、廣池は、人間の目に見えない精神の世界に流れる真理・法則の存在を実感するとともに、反省と感謝と報恩の精神で生きることが、神の意思すなわち天地自然の法則に適い、神につながっていく喜びを得・体得していく。それは、すでに一宗教の組織内に留まって生きるという次元を超えて、一人の人間が、真実に神と向き合いながら生きる姿、他と比較するならば、ドイツのK・ヤスパースの「生きた哲学的信仰」に似て、廣池は一つの科学的（最高道德的）信仰の境地を開いていく。

(8) 「今春以来のことを考ふるに、慢心や我慢盛んにし

て、登りつむれば落つる理あり。常にふまれ、けらるる失意の地にありて努力することを喜ぶべし。いかなる事あるも、すべて絶対服従のこと」(廣池千九郎日記)

記「大正四年七月八日」
(9) 「神様がよき産物をよきものとして私に示されず、これをかえつてわるいものとして私の頭を下げさせてくださる」(同上日記「大正五年一月二日」)

「上に対してはもちろん、一切各方面に不足の心づかいをなすことと、不足を口にする事なく、ひたすら感謝歡喜すること」(同上日記「大正九年四月二三日」)

「真の心に喜びを持つこと。右の心になれば、神様の仰せの国の柱になること。」

治定は、

一、本部に対する事でも、研究の前途でも、そばの

境遇でも、これで結構、結構とほくほく喜びます。どんなことも案じぬこと、慣らぬこと」

(同上日記「大正一〇年九月二三日」)
「絶対的信仰によりて一切無我となり、上にも下にも絶対服従、絶対無埃」

(同上日記「大正一四年七月一九日」)

五、廣池と諸聖人との接点

晩年の廣池の著作『道德科学の論文』に、廣池が聖人に共通一貫するところをどこにしていたかを見いだすことができる。

(一) 諸聖人に共通一貫するもの

1 一貫する道德上の原理

「記録に現れておる世界諸聖人の実行は、これを一々に観察すれば断片的にしてみな各々その行動を異にしております。しかしながら、その行動に一貫するところの道德上の原理を通覧すれば全く一に帰するのであります。すなわちソクラテス、キリスト、釈迦及び孔子の実行上に現れたる道德上の原理は、みな普通人間において認められておる道德の程度を超越して、ひとえに人心救済といふことであつたのです。(中略)かくて人心救済のためには、諸聖人みな幾多の苦心苦行をなされたのでありますが、自己自身にはそれが苦心でもなく、苦行でもなく、

真に無上悦樂の業であつて、そのいうところ、行うところは甚だ高遠なるも、結局、みな世界の事実に一致して悻^{もど}らず、その教うるところは時と場所とを超越しておれど、いずれも実現の可能性を有せぬものはないのであります。」(『道德科学の論文』⑥一八四—一八五頁)

2 聖人の特質

(1) 聖人は必ず宇宙根本唯一の神を信じてその意思に服従し、一切自己の意見・主義・希望もしくは欲望を主張するようないたがうべきです。

(2) 往々天啓を受くることがあります。

(3) 伝統(この語は今回モラロジーにおける一つの特有なる観念を表現するためにギリシヤ語を借りて造つたところの新語であります。)を重んじ、且つ古聖人の教説を遵守して、ただこれを述ぶるにとどめ、自己の意見をもつて新たに創作する事はないのであります。

(4) 一視同仁の慈悲の心を有し、いかなる場合においても、自ら反省して他人を責むることがありません。

(5) 神の心を体得して自己の品性を造ることを主とし、一切の利己的事業を企てぬのであります。

(6) 人為的に主権を有する団体を造らず、その結果として本山・本部・寺院もしくは教会等のごときものを建設致しませぬ。(但し、ときにその精神を理解せる人々による喜捨による淨財をもつて、人心の開発もしくは救済に必要な場合もしくは一般人の幸福増進上に必要な場合に、最小限度の建物及びその他の施設はこれを許したのであります。)

(7) 一切の虚飾を用いず、ただ必要な礼儀・礼節はこれを重んじたのであります。

(8) 中庸を尚ぶのであります。

(9) 自己の精神作用及び行為の基礎をすべて神の精神に置き、かくのごとき自己の精神及び行為の精髓を他人の心に移植して人心救済をなすのです。

(10) 世界の平和と人類の幸福とを目的として、一宗・一派もしくは一団体の保存及び発達をのみ図ることなく、すべての行動および施設、みな全人類に対して普遍的性質を有しておるのであります。

聖人とはおおよそ右のごとき諸性質を具備する人であります。

(『道德科学の論文』⑤六一—九頁)

(二)、廣池に感銘を与えた聖人の事蹟

1 ソクラテスの感化力

「その絶大なる感化力は、その最後の毒杯を仰いだ動機及び目的にあるのです。(中略) この至高絶大なる人類愛の動機及び目的は、ソクラテスが人類の大恩人たり、世界の大聖人たる理由であるので、極東にある我々までも随喜^{ずいき}渴仰^{かつおつ}を禁せざるところであります。いやしくも人間が一生の難局に当たりて、あるいは事危急のために刹那の間、何人にも相談する時間なき場合、もしくは事重大にして何人に相談するもその相手となり得るものなきときに当たり、その難局に善処せんとする場合、これを救済して真の安心立命を与えるものとしては、ソクラテスの最後の教訓に優るものはないであります。」(『道德科学の論文』⑥一九六頁)

2 キリストの感化力

「おおよそ人間が一生の難局に当たりて、あるいは事危急のために何人にも相談する時間なき場合、あるいは事重大にして何人に相談するも、その相手となり得るものなきときに当たり、これを善処せんとする場合、これを救済して真の安心立命を与えるものは、キリストの惨死の光景とその後に現れたる偉大なるキリストの感化力の関

係を觀て、これに対する深き理解をなすよりほかないことを考えらるるのであります。全くキリストの精神が無
我の慈悲心と純真の救済心とによりて充滿されておった結果であることが明らかに認めらるる以上は、たとい私
どもが今日いかなる境遇に立つことがあるとしても、何ら憂うところはなはずであります。そこで人間の感
化不遇の極度に達せる場合における最後の安心立命はソクラテスとキリストとによりて得らるるということが出
来ましよう。」

3 釈迦の感化力

「私の永年の体験と今回モラロジの研究とによりて、すべてのものはその形式を同じくするも、その精神の相
違によってその結果に大差を生ずるものが分かったのであります。(中略)釈迦一代の事跡を考察すれ
ば、その精神の奥に包蔵するところの慈悲心の絶大なりしことと、その精神の顕現たる人心救済の事業に対する
勤苦・思索・計画及び奔勞ほんろうのことごとく宇宙自然の法則と人類生存及び發達の法則とに合致せしことが、まさ
に釈迦の感化力のかくのごとく全世界に普及せし一大原因であることが明らかになったのであります。」

〔『道德科学の論文』⑥一九八一—一九九頁〕

六、廣池の最高道德的神觀と信仰心

(一)、神人一如の神觀

——神は人間の心(至誠心)と直接つながっているという神觀——

廣池は、『中庸』の「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり」の教えに学び、私たちの心づかいと行い
は神(すなわち全靈)につながっていて、神の法則になつたときに、感謝や幸せを感じることが出来るものであ

るとの神人一如の人間觀に立っている。廣池の『日記』はこの記録であるといえる程、大正元年の大患以来、た
えず自分の体を通して、何度も何度も、繰り返し繰り返し、そのような体験を味わっている。

「私どもは最高道德において聖人の教説を採用し、まず宇宙の現象を持って神の表現となし、私どもの心をもつ
て神の心の分靈となすのであります。且つその分靈の行為が本体の靈の法則と一致する場合には、その分靈は
幸福となり、然らざる場合に不幸となるものと見なすのであります。かくて人間一切の精神作用及び行動の根
本が神の恩恵であるということになり、いかなることもすべてこれを神に向かつて感謝することになるのであ
ります。これがモラロジの最高道德における神に対する原則であります。」〔『論文』⑦二四八—二四九頁〕

このような信念に基づいて生活する廣池は、たえず神と共に生き、天命を自覚し、実感しながら、日々を過ご
したようである。この神の確信ともいえる神觀は、極めて神道的で、キリスト教や仏教の神や自然についての考
えとは隔たりがある。世界の諸宗教に共感しながらも、最後のところで廣池の神觀を規定しているのが日本的で
あるというのも、当然のこととはいえ、ひとつの特徴と言ふべきであらう。今回の報告では、廣池の神觀が、様々
の宗教研究・宗教体験の中から、最後に、日本の神道的神觀念に通じた一つの悟りというか、超越の境地にたど
りついているということを確認したい。

(二)、神の心と人の道

1 神の心とは

——本質は「正義を含んだ慈悲」——

廣池の宇宙論の特色は、ストアやキリスト教の自然法思想に似て、大自然の働きに万物を生成化育する慈悲の

法則を感得し、その慈悲を最高道德の精神の中核に据えている点にある。この慈悲は単なる甘やかしではなく、内に正義の原理を含んだものである。

第一は、神の働きは宇宙の諸現象において、公平に適用されること。

第二は、大自然の運行や人間性の中に、自然法のようなものを見いだそうとすると、正義が主要な原理として取り出されること。「自然法」は宇宙の本体(神)の作用に関する法則であり、その実質は正義であって、中庸・平均・平等・調和・中正である。

第三は、人間社会を観察しても、不完全な社会に、自由と平等と個の尊重という正義を実現しようとする働きが普遍的に発見されること。

第四は、諸聖人の教えの中に、中庸・中正・平均というような正義の本質に連なる教えが開示されていること。したがって、自然の法則は万人に公平に作用し、心づかいと行いが自然の法則に適えば進化発展し、逆の場合は退化滅亡に向かうという。

「神の本質は正義と慈悲である。真の正義と慈悲を実現するためには、その基礎として完全な知性と完全な道徳性が必要であるが、その両者を兼ね備えているのは神のみである。人間は不完全であるから、これを完全な形で体現することはできない。しかし、神・聖人を模範として、それに一步でも近づくように努力するところに、神意同化の道がある。」

〔「道德科学の論文」 ⑦五〇—五一頁〕

2 聖人に倣って

廣池の目指したのは神ではなく、神の心・聖人の心であった。自分の心を神の心・宇宙自然の法則・慈悲の心に同化させ、人心の開発救済に没入するというのが廣池の姿であった。その廣池が、柔らかな慈悲心の持ち主で

ある聖人に対して抱いていた憧憬の念を、つぎのように述懐している。¹⁰⁾

(10) 「真の慈悲心は私自身の多年の経験から推して見るに、容易に人間の精神の中に起こってくるものではないのであります。ここにおいていわゆる慈悲心が古来諸聖人の精神に自然に湧き出たものとすれば、そのいわゆる諸聖人は全く神の再現というよりほかないのであります。しこうして万一当該諸聖人は学んで慈悲心を得たとすれば、更に偉大なる事跡と言わなければ

ばなりません。私は前記の最高道德における重要事項の原理を理解して、自己の理性を訓練し、感情を美化せんとなしつつ、人為的に慈悲心を造ろうとして苦心且つ努力しておるのであります。故に慈悲心の完成の困難なことを知悉しておるのであります。さればますます聖人の人格を敬慕する次第であります。〔「論文」 ⑦九七—九八頁〕

「これ私が約二十年以来かかる心づかいを修養してきた結果、はじめてその難きことを知り、その結果として古代聖人の実に偉大であったことが分かりました。けだし聖人は自然に慈悲がその精神から湧き出たものと思われまます。しかるにわれわれ尋常人の慈悲は人為的であって、いわゆる人造の愛情ですから、その価値は聖人の慈悲に劣るのであります。且つこの人造の慈悲さえも容易に出来ぬのであります」

〔「論文」 ⑧三七五頁〕

ここには、限りなく神・聖人の慈悲心との隔たりを感じながらも、慈しみ深い神や聖人に抱かれ、その慈愛に噛み砕かれながら、その慈悲に近づこうとして生きる廣池の純粹な姿をかいま見ることができるといえる。

三、真の救いへの道と神

先の「宗教よりの超越」ともつながってくるのであるが、学者として人類の安心・平和に資する道を残していくという神との誓いの道を、真実に実行していく過程で、廣池は一つの神観と道德観に立つに至っている。それ

は

「人間の最大幸福は最高道德の実行によって得らるるものであって、何の神を信じ、何の教えを奉じておるといふので幸福になるのではないのです。ただ最高道德を行うに至ったところの内面的動機が直接に聖人の教えから来たか、モラロジーから来たか、ある何らかの機会から来たか、もしくは右の教者を合したところの複雑な精神作用の結果から来たかということは問題であります。それはただその当事者一人の問題であつて、公然たる社会的問題ではないのであります。」

〔道德科学の論文〕⑦三八七—三八八頁

このように、廣池はどの神が最善であるか、どの信仰が絶対であるかという比較・論証的問題に関心を抱いていない。神の心は慈悲なり。その慈悲の心になり、慈悲の心を実践する、ここに廣池の神のとらえ方の特徴がある。

七、まとめ——廣池千九郎と神——

今回の報告では、廣池千九郎のつかんだ神概念の内容を詳細に吟味するところまで至らなかつた。比較思想・比較宗教的視座にたてば、もつと突っ込んだ吟味が必要であると思われるのであるが、未だなし得なかつた。

ただ今回、著者が目指したところは、廣池が生涯を通して明らかにしようとした根本的考え（存在根拠）を確認するということであつた。そこに至るまでに、廣池にどのような人生があつたのか、その学問的経歴や視点、生活状況等のなかから、どのように神を問題とし、神に近づき、同化しようと努力したのかを確認する必要があると考えたからである。今後、廣池を日本の精神史に位置付けながら研究を進めていくに当たつて、廣池と神道

儒教、仏教、キリスト教などとの関わり、その諸説の理解の仕方・その特徴など、専門的には限らない課題が残されている。

また、どちらかといえば歴史学者、法学者として専門の領域を深く極めていた廣池を、思想的に、また宗教学的に研究することが、どの程度的を射ているのかという疑問も無しとしない。それは廣池がいかなる意味で、思想家として、はたまた宗教家として研究するに値するかということを、明確にすることが必要であると考えたからである。

今回は、とにかく廣池の存在根拠はどこにあるのかということ明らかにするということに焦点をあててみた。それは今後、廣池を比較思想の観点から研究をするに当たつて、廣池の生涯とそこに一貫する根本思想を明確にしておくことが、出発点であると考えからである。その意味では、今回の研究は比較研究の出発点に立つたばかりで、課題ばかりの残つた研究報告になつてしまつたことをお詫びしたい。

そこで最後に、儒教や神通、仏教やキリスト教、それに西洋の諸学間に出会い学びながら形成していった廣池の最後の神理解が、如何なるものであつたのかを、再度、明らかにしておきたい。

廣池が最終的に辿りついた神の實質、それは慈悲心ととらえられていた¹¹⁾。その神との距離、それは人間として、純粹に至誠慈悲に生きることの困難さの自覚としては、遠く隔たつているもの、近づき得べき存在（境地・地平）として、身近に感じとられていた¹²⁾。また、神は常に、万物を生かし育て育む働きをするものととらえられ、その意思につながり、その意思を生かすべく働くものには幸があるとの信念に立っている¹³⁾。

(11) 神・聖人の實質を慈悲心とみなす

「人間の慈悲心は、神の心を体得せる聖人の精神から

生まれ出でて、すべて聖人をして聖人たらしめていくところの唯一の精神作用であり、いわゆる最高道

徳の最も重要な原理と相即不離の關係を有するのでありますから、最高徳徳の実質の核心をなすのであります。この精神作用の有ると無きと、浅きと深きとが、その個人の品性を定むる標準となるのであります。しこうして最高徳徳はすなわち最高の学問、最高の信仰を基礎とするものでありますから、この慈悲心の表現及び作用は、人間の最高理性と最高感情との表現及び作用であるのです。〔道德科学の論文〕⑦八六頁)

(12) 人間の目的は神の慈悲心(品性)を指していくところにある

『無量寿経』における無量寿仏の出現の記事をはじめ、すべて諸聖人と神との關係に関する記事を総合して見るときには、尋常人の偉大なるものが最高徳徳を実行すれば聖人となり、聖人更に最高品性を造ればついに神になるということはおのずから明白で

あります。神の品性すなわち道德上の地位を右のごとくに見るときには、神は絶対的でなくして、人間と相對的の關係にあつてその最高位に位するのであります。〔同上〕⑦二五九頁)

(13) 神・伝統につながつた生活こそ幸福への道である
「そもそも最高徳徳の伝統は神(本体)にその淵源を發しておりまして、その神をもつてあらゆる万物の根元と認めておるのであります。たとえば、植物に強固なる根ありて幹・枝・葉・花もしくは実の榮ゆると同一であると同様にあります。故に伝統はこれを人間の精神のおよび物質的生活の根元と見なすべきものであります。故にいかなる場合においても、この根元を離れずして進みしものは、たとい途中に如何なる困難あるも、ついに最後の幸福に到達するのであります。〔同上〕⑦二八二頁)